

岩手・釜石ベースで心のケアのチームで働く

扉をあけて  
元気さん

よしだ としお  
吉田 俊雄 さん



「シスター高木（慶子 / 援助修道会）が7月に釜石で講演し、心のケアのコアになる人が必要、ということになって」ということになって「この悲嘆に向き合うというのはこれから」と感じ

た。8月から隔週で1週間ずつ釜石に入り、心のケアのボランティアをする。98年に息子が急逝。8年前に61歳で職場を辞めた。自分は息子のことを知らない仕事人間。仕事と家庭とどっちが大事か、とよく言われていたことを思い出し、怒りを覚えました。それは比較すべきことじゃない。悲嘆の中で怒りを覚えるのは自然なことだと、後で学びました。

倒れて3週間、意識が戻らず亡くなった息子のメッセージを受け止めて生きていこうと自覚した。「その後、佐藤初女さんとシスター高木に出会いました。佐藤さんは会っただけで言葉が必要らなかった。すごい安心感。ただ存在することのすごさを感じました」

8年前に61歳で職場を定年退職。妻の紀美子さんと共に、高木修道女が主宰する生と死を考える活動に参加。家族をしくした人たちのグループにかかわる。また佐藤さんが青森で行う「森のイスキア」に賛同して、自宅を開放し「小さな森東を開放し」「小さな森東を京も始めた。「聴くことの大切さ。自分が新しい歩みに入っていく。傾聴は企業社会の中ではないことでしたから。人と当の復興が始まる。これをめ、本名の癒やし、本振り返ると、それは相当の長期戦になります」

「何をやるでなく、存在自体を大事にする」に なっていないと、聴くことはできないと気づきました

「運ばれて」、2002年に夫妻で受洗。「呼ばれたら受ける、その生き方が僕のテーマ。今回も「はい」と言おう」と

被災地、大槌町(岩手)の町が流された跡を見た体験が大きい。「ここで亡くなった多くの愛する人が復活し、共にいてくれると実感できて初めて、

「奉仕のない人生には意味がない。犠牲のないのは奉仕じゃない」 69歳